

Title	南語における「日」母の語音層：日本漢字音との対照
Sub Title	The phonetics of "Ri" Mu in Minnan dialect : a comparison with Japanese Chinese characters
Author	小松, 嵐(Komatsu, Ran)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1996
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.71, (1996. 12) ,p.118(145)- 135(128)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00710001-0135">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00710001-0135</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 南語における「日」母の語音層

——日本漢字音との対照——

小 松 嵐

## 1 閩南語（地図1参照）

閩方言は中国漢語系七大方言区中の一つであり、「閩」は中国・福建省の簡称である。閩南語は福建省の南部で話されている方言群であり、主に泉州地区、漳州地区、厦門地区を含み、厦門音を代表とする。厦門地区では厦門、同安、金門三つの県と市で、泉州地区では泉州、晉江、惠安、南安、安溪、永春、徳化等で、漳州地区は漳州、龍海、長泰、華安、南靖、平和、漳浦、雲霄、詔安、東山等十県市を含んでる。その他に福建省西部の龍巖、漳平、大田、尤溪等も閩南方言圏に属するが、使用人口は凡そ1,200万である。

福建省の他に廣東省の潮汕地区12県市で、凡そ1,000万人、海南省12県市約400万人、雷州半島七県市約400万人、廣西、浙江、江西等の省約180万人、台湾の大部分地区約1,400万人が閩南語を使用している。閩南方言の影響は更に東南アジア地区にも及んでいる。現在、閩南方言の使用人口は5,000万強と推定される。

\* 本節にある方言の使用者推定人口については、すべて周長楫1991.に拠る。

### 1.1 「日」母と語音層

中国の音韻学では、声母のことを「母」と称するが、漢字を以て表わす。

「日」母が始めて現われたのは唐末宋初であったが（4.1参照）、当時「日」母の推定音價は [nz]（鼻音+口蓋音）だった。（中古36字母・音價

推定表参照)しかし、現代標準語の「日」母はそり舌音の [r] となった。

nz → r, 凡そ一千年の間重なった音声の変化にはきつと何らかの痕跡が残っているはずだが、そのような痕跡はすなわち語音の層と考えられる。現代標準語では見られない語音の層は、漢語系他の方言から見ることが出来る。そのような「層」は日本において、中国語の古い発音を反映した漢字音（特に呉音，漢音）からも推察できる。

## 2 閩南方言声母の差異

閩南方言圏三地区の泉州，厦門，漳州の音韻体系にはそれぞれの差異が見られるが，韻母の面において差異がとりわけ大きい。声調は七つであるが（平上去入四声は陰陽に分かれる），厦門，漳州音は陽上無しで，泉州音には陽去が無い，その他，調値にも若干の差異が見られる（閩南語声調表参照）。本文は韻母，調値などを取り除き，声母のみに注目することにした。

### 2.1 閩南語声母の体系

閩方言は十五声母であるが，その声母体系は上古音を受け継いだものと言われ，“古無輕唇音”，“古無舌上音”（4.1参照）などの特徴でその古めかしさを示している。閩南の泉州，厦門，漳州の声母の体系は他の閩語方言と同じ十五声母体系に属し，ほぼ一致しているところが多いが，差異も見られる。最も大きい差異は，「日」母にあると考えられる。以下表の如く。

[表1] 閩南方言声母

泉州(14/17)<sup>(1)</sup>

p	p'	b(m)
邊比輩	普皮平	文麻米(梅妹門)
t	t'	l(n)
地竹重	他托徹	柳類泥内入日(耐年乳)

ts	ts'		s
爭奇之	出秋市		時四常
k	k'	g(ŋ)	h
求古工	氣靠琴	語牛疑(雅硬)	喜虎非
∅			
英員由			

漳州(15/18)<sup>(2)</sup>

p	p'	b(m)	
邊比輩	頗皮平	門麻米文(梅妹)	
t	t'	l(n)	
地竹重	他托徹	柳泥類內(耐年)	
ts	ts'	s	dz
曾奇之	出秋市	時四常	<u>入如日乳</u>
k	k'	g(ŋ)	h
求古工	去靠琴	語牛疑	喜虎非
∅			
英員由			

説明：1. 一番目の例字は方言韻書の代表文字である。

2. 声母同一の場合同じ例字を用いる。

3. 下線の字は「日」母である。

## 2.2 泉州, 廈門, 漳州的「日」母

表1. に示したように、「日」母が泉州, 漳州においては泉音 [l], 漳音 [dz] である。閩南方言標準音の廈門音の一部(市区)は [l] で、泉音に近い; 一部(郊外)は [dz] で、漳音と同じである。(表略)

泉, 漳, 厦の「日」母による違いはよく知られているが、その原因はいったい何であろう?

### 2.2.1 羅常培の説

羅氏は(1930, p. 8) 廈門日母の発音について、「從理論上講，廈門的 [l] 音讀的本來不甚清晰，所以往往可以拿它替代 [d] 音……，邊音跟破裂摩擦音的發音方法比純粹的破裂音尤爲接近，那末由 [dz]→[l] 在音理上是可能的」と述べた。

また、羅氏は『唐五代西北方音』(1933, p5) において「……由 [dz]> [l] 在廈門音里也有類似的例」と指摘した。

### 2.3 dz>lの不合理性

羅説によれば、廈門の「日」母は [dz] から [l] に変化したと見られる。

しかし、廈門音「日」母の差異は孤立したものではなく、それはもともと泉州音と漳州音の差異を反映したものであるが、廈門音「日」母の差異の源は泉音と漳音にあると考えられる。

#### 2.3.1 歴史から見た泉，漳，厦

閩地方の人々は「避乱」「徴蠻」のために中原地区から閩地に移住してきたと言われる。その移住は秦漢時代から始まり、唐代に至って盛んになった。

廈門音は閩南語の標準音となっているが、その歴史は泉州漳州より新しい。閩南地方では泉州が最も早く開いたが、紀元四世紀から十九世紀の間、泉州港は中国海外交通の重要な港として活躍した。経済の繁栄にもなって、言語の発達もかなり進み、泉州語は早期閩南方言の代表であった。閩南地方の最も古い劇——梨園戲、及び中国の古い音曲——南曲ともに泉州音を標準とする。

漳州の開発は七世紀で、泉州より遅い。明の時代から漳州の月港（今の海澄）が勃興し閩南地方貿易の中心となり、漳州語の地位も次第に高まった。

廈門はもともと泉漳港の間の小さな島であり、清に至るまで同安県に属

した。厦門地方の勃興は清のアヘン戦争以後であった。十九世紀の初期、新興の厦門港は地理的の良さによって発展が速くて、泉州、漳州から大勢の人が集まってきて、閩南地方の中心町となり、厦門語もついに閩南方言の代表となった。しかし、厦門語は同安語の変体と見られていて、同安語もまた泉漳の間の下位方言であったので、厦門語には泉、漳両地方の特徴をもっていることも不思議ではない。故に、厦門語は俗に「不漳不泉」とも言われる。

### 2.3.2 「十五音」方言韻書から見た「日」母

方言韻書は「使農工商賈，按卷而稽，無事載酒問字之勞」（『彙音妙悟・序』）のために作られたもので、閩南方言韻書は全て閩方言の十五音の系統である。

「十五音」は福建地方に流布している通俗韻書の総称で、最も早く見られたのは福州音系の『戚林八音』であり、後に泉州漳州などの韻書が相次ぎ編纂された<sup>(3)</sup>。韻母の面においてはかなりの相違が見られるが、声母十五がほぼ同じで、それによって「十五音」と称した。

#### A. 『戚林八音』——福州方言韻書

『戚林八音』は清の乾隆年間（18世紀前半）の『八音字義便覽』と『珠玉同聲』の合刊本である<sup>(4)</sup>。

[表2] 『戚林八音』十五聲母

柳	邊	求	氣	低	l	p	k	k'	t
波	他	曾	入*	時	p'	t'	ts	n	s
鶯	蒙	語	出	喜	ϕ	m	ŋ	ts'	h
打	掌	與	君	知	(語呂合わせの付け足し)				

\* 「入」は日母の代表文字，[n]と発音する（泥[n]日同音）。

#### B. 『彙音妙悟』——閩南泉州方言韻書

清の嘉慶5年（1800）泉州人黄謙が泉州方言のために編纂したもので、すべての閩南方言韻書の粉本と言われる。

[表3] 『彙音妙悟』十五聲母

柳邊求氣地	l	p	k	k'	t
普他爭入時	p'	t'	ts	*	s
英文語出喜	ϕ	b	g	ts'	h
打掌與君知					

\* 泉州では「入」と「柳」が同音で、[l] とする（泥 [n] 無し、[l] とする）。十四音では体裁がよくないので、『戚林』十五字母の形式に従って、字母だけはそえておいたのであろう（王、1969）。

音素を整えるために「z」を置くのは普通ですが、本文はそのような形式に従わず、「\*」にした。

### C. 『彙集雅俗通十五音』——漳州方言韻書

1818年、漳州的謝秀嵐が漳州方言のために編纂した。それも『彙』書は「悉用泉音，不能達之外郡」（雅俗通・序）のためであった。

[表4] 『彙集雅俗通十五音』十五声母

柳邊求去地	l	p	k	k'	t
頗他曾入時	p'	t'	ts	dz	s
英門語出喜	ϕ	b	g	ts'	h

\* 漳州的「入」は [dz] とする。その [dz] は非常に柔らかい、仏語の「j」、或いは英語の pleasure, precision, crosier の「s」に近い——（W. H. Medhurst, 1831『福建方言字典』）、また「舌面前，帶音無氣，破裂摩擦音」で（羅，31）、口蓋化している。

以上のとおり、閩方言韻書の詩のような形式は明らかに福州韻書の伝統を沿襲したものであるが、十五声母で、声目用字のみが若干違う。

十五音の「入」は中古『廣韻』（宋、1011年）の“日，娘，泥，雲，從”五つの声母を含み、日母を主とする。以上三つの韻書が示しているように、閩南語泉音と漳音の日母が異なり、閩北語福州音の日母とも異なる。

章太炎氏はかつて「古娘日二紐歸泥説」（1919）と論証したとおり、上古の文献においては中古の日母（nz）も娘母（n）も明らかに泥母（n）と同一であった。例えば、人「奴顛切」、仁「乃定切」、人仁之聲今在日

紐」「人仁本音如侏在泥紐也」,「古音任同男南, 本在泥紐」, 等等。

また、閩方言福州音日母の白話音は未だに変化していないが(呉方言日母の白話音も [n] とする)<sup>(5)</sup>, 泉音漳音は殆ど変わってしまった。

そのような差異は時代とはいかなる繋がりであろうか? その差異は二つの言語層とみてもよいであろうか? 日本の漢字音にもそのような相違が見られるが、時代に伴う変化と言われるようだった。閩南語においてもそのような時代の面影が見られるだろうか?

### 3 日本漢字音との対照

#### 3.1 日本漢字音

日本漢字音は主に「呉音」と「漢音」二つの系統に分かれ, 「呉音」は五世紀前後(中国の六朝時代, 南朝と北朝分立していた頃)日本に伝わった漢字音で, 中国の長江下流, つまり当時南朝の栄えた華中, 華南地方の字音であると言われている。「漢音」は7~10世紀の間唐の都長安に赴いた遣唐使の伝えた長安語で, 中国西北方言の一種である(藤堂, 1984)。呉音, 漢音の声母については様々な違いがあり, たとえば漢語の日母(r)は, 呉音ニ・ネ, 漢音ジ・ゼ; 漢語の明母(m)は呉音マ行, 漢音バ行; 漢語の泥母(n)は, 呉音ナ行, 漢音ダ行; 漢語の濁音は, 呉音では濁音, 漢音では清音, 等々。ここでは「日」母を中心に, 先ず呉音と漢音の例を上げてみる。

(呉音・漢音) — 藤堂, 84, p288

二 (ニ・ジ)	人 (ニン・ジン)
女 (ニョ・ジョ)	然 (ネン・ゼン)
任 (ニム・ジム)	若 (ニャク・ジャク)
饒 (ネウ・ゼウ)	日 (ニチ・ジツ)

藤堂氏によれば, 「漢語の日母は上古から六朝迄, 全て ni-と 言う形を備えていました。たとえば『人 nien』『日 niet』でした。それが唐代に入ると, 『人 rien』『日 riet』となりました。つまり ni-の所が ri-に変わったのです(擦音化といえます)。この ri の発音は, じつはそり舌音の要素



を含むのですが、日本人にはジ・ゼの様に聞こえたので、『人じん・日じつ・然ぜん』という漢音式の発音が生じたのです。」(84, p229)

有坂秀世「隋代の支那方言」(57, p289)において、切韻時代の「若字の頭音は、北方ではnzであり、江東ではnであった。……これらの特色は、かなり古い時代から存したものである」と説いた。

章太炎説、藤堂説及び有坂説いずれも上古音の日母は鼻音のnであった。

泉州の白話音にはまだ鼻音の要素が残っているが、漳音には殆ど見られない。以下表の如く。

### 3.2 対照表

説明：1. 鼻音化韻前の日母「n」と記する；

声門鎖閉音は「h」と記する；

文語音は□<sup>文</sup>、白話音は□<sup>白</sup>と記する；

声調を省く。また、呉音は「呉」、漢音は「漢」と記する。

2. 漢字音は『漢和大辞典』(藤堂明保, 95, 学研)に拠る。漢字音の国際音声記号は『日本語教育事典』(日本教育学会編, 大修館, 82)に拠る。

[表5] (一)

	日	兒	二	耳	而
泉	lit	li	li <sup>文</sup> nŋ <sup>白</sup>	nŋ <sup>文</sup> hi <sup>白</sup>	li
厦	lit	li	li <sup>文</sup> nŋ <sup>白</sup>	nŋ <sup>文</sup> hi <sup>白</sup>	li
漳	dzit	dzi	dzi	dzi	dzi dzî
呉	nitʃi	ni	ni	ni	ni
漢	dʒitsʉ	dʒi	dʒi	dʒi	dʒi

## (二)

	如	儒	乳	汝	辱	褥
泉	lu	lu	lu nĩ <sup>白</sup>	lu	liok	liok
厦	lu	lu nĩ <sup>白</sup>	lu	lu	liok	lick
漳	dzu	dzu	dzu <sup>文</sup> dzĩ	dzi	dziok	dziok
吳	njo	nju	nju	njo	niku	niku noku
漢	dzo	dzuudzu	dzo	dzoku	dzuuku	

## (三)

	入	熱	人	仁	任
泉	lip	liat <sup>文</sup> luah <sup>白</sup>	lin <sup>文</sup> laŋ <sup>白</sup>	lin	lim
厦	lip	liat <sup>文</sup> luah <sup>白</sup>	lin <sup>文</sup> laŋ <sup>白</sup>	lin	lim
漳	dzip	dziat <sup>文</sup> dzuah <sup>白</sup>	dzin	dzin	dzim
吳	nju	netsu	nin	ni	nim
漢	dzu	dzetsu	dzin	dzin	dzimuu

## (四)

	認	忍	刃	肉	若
泉	lin	lim	lim	liok <sup>文</sup> hiak <sup>白</sup>	liok <sup>文</sup> nã <sup>白</sup>
厦	lin	lim <sup>文</sup> lun <sup>白</sup>	lim	liok <sup>文</sup> bah <sup>白</sup>	liok <sup>文</sup> nã <sup>白</sup>
漳	dzin	dzim <sup>文</sup> dzun <sup>文</sup>	dzim	dziok	dziak <sup>文</sup> dzuah <sup>白</sup>

吳	nin	nin	nin	nikuu	njakuu
				njuu	nja

漢	d3in	d3in	d3in	d3uuku	d3akuu
---	------	------	------	--------	--------

(五)

	弱	柔	潤	燃	染
泉	liok	liu	lun	lian	liam
				hĩã <sup>白</sup>	nĩ <sup>白</sup>

厦	liok	liu	lun	lian <sup>文</sup>	liam <sup>文</sup>
				hĩã <sup>白</sup>	nĩ <sup>白</sup>

漳	dziak	dziu	dzun	dzian	dziam
					nĩ <sup>白</sup> *

吳	njakuu	njuu	nin	nen	nen
漢	d3akuu	d3uu	d3um	dzen	sen

(六)

	軟	戎	冗	讓	壤
泉	luan <sup>文</sup>	liɔŋ	liɔŋ	liɔŋ	liɔŋ
	nŋ <sup>白</sup>			nĩu	

厦	luan <sup>文</sup>	liɔŋ	liɔŋ	liɔŋ <sup>文</sup>	liɔŋ
	nŋ <sup>白</sup>			nĩu <sup>白</sup>	

漳	dzuan	dziɔŋ	dziɔŋ	dziɔŋ	dziaŋ
	nuĩ <sup>白</sup> *			nĩɔ <sup>白</sup> *	

吳	nen	njuu	njuu	njo	njo
漢	dzen	d3uu	d3o	d3o	d3o

(七)

	饒	擾	蕊	仍
泉	liau	liau	lui	liŋ

厦	liau	liau	lui	liŋ
---	------	------	-----	-----

漳	dziau	dziau	dzui	dziŋ
---	-------	-------	------	------

吳	njo	njo	nui	njo
---	-----	-----	-----	-----

漢            dʒo            dʒo            dzui            dʒo

\* 『雅俗通十五音』によれば、漳州“染，軟，讓”の白話音 [n] は日母 (dz) ではなく、柳母 (l) である。

### 3.3 まとめ

上記表の示したように、泉州、厦門音の「日」母の文言音はlで、一部の白話音は韻母の鼻音化に影響を受け、l→nに変化した。

泉州、厦門の「l」は完全鼻音でない点が日本の呉音と違う。しかし、鼻音化韻母前の「n」は呉音に近い。韻母の鼻音化は唐五代の頃から現われ（羅，33），鼻音韻尾の-ŋが消失して，鼻音化の「~」となった。日本漢音のウ，一イのような音声表記は，そのような変化を表わすと言われる。

文語音と白話音二種類の発音を持つ方言は閩音系に限らず，中国殆どの方言に見られる。但し，閩語においては文白二つの層をもつ字が極めて多く，特に閩南方言文白音の対応は普遍的な存在である。文言白話音の区別は移民関係によるものと見られる。そのような区別は一つの方言の中の二つの層と見てもよいと思われるが，白話音は文言音より古いとも言える。例えば，泉州白話音は一般には漢晉時代の官話音と言われ，文言音は唐の官話音と言われる（黄典誠，85）。

日母は上古音 (n) から中古音 (nz) 擦音化したのが，鼻音はまだ残っていた。しかし，漳州の dz は鼻音ほとんど残らず，口蓋化 (palatal) した。漳州の日母 (dz) は日本の漢音とまったく同じとは言いきれないが，似ているところが少なくない。僅かな鼻音化韻母が残っているところを見ると<sup>6)</sup>，日本の漢音よりちょっと早いのが，ほぼ同じか，つまり「ni-から ri-に変わった頃」のそり舌音の要素を含んだものと見てよいであろう。

## 4 「日」母語音層

黄典誠82.日母 (l) は「上古音的殘餘」として例を挙げた。厦門のlは英語のdに似てるので，厦門人は [d] を真似るのに「老」の声母をあて

る。よって、藤堂氏廈門音係14声母の來母，日母を [d] で統一して，「つまり音韻的には [l] もない」と指摘した (80, p155)。

上古音の日母は n であることを前人によって証明されてあるが，その n が泉州，廈門音の l/d とはいかなる繋がりであろうか？

#### 4.1 nd の可能性

nd, 鼻音声母の非鼻音化と言うものである。

上古音の声母は舌，齒，牙，喉，唇五音に分かれ，n (泥) は舌音に属する。

[表六] 古本紐 (上古の形をよく保存した声母)

舌	t(端)	t'(透)	d(定)	n(泥)	l(來)
齒	ts(精)	ts'(清)	dz(從)	s(心)	
牙	k(見)	k'(溪)	g(群)	ŋ(疑)	
喉	·(影)	h(曉)	h(匣)		
唇	p(幫)	p'(滂)	b(並)	m(明)	

\* 古本紐は民國始めの学者黄侃 (1886—1935) 『音略』に拠る。

後に舌音から舌上音グループの知，徹，澄，娘が分出し，『切韻』(隋，陸法言，601年)に現われた。

日母 (nz) が初めて現われたのは敦煌寫本「守温30字母」(唐末)であったが，同じ舌上音グループだった。

[表七] 『守温音學殘卷』30字母

——南梁比邱守温撰

<唇音>	不	芳	並	明	
<舌音>	端	透	定	泥	——是舌頭音。
	知	徹	澄	日	——是舌上音。
<牙音>	見(君)	溪	群	來	疑 等 字——是也。
<齒音>	精	清	從		——是齒頭音。
	審	穿	禪	照	——是正齒音。

〈喉音〉 心 邪 曉——是喉中清音。

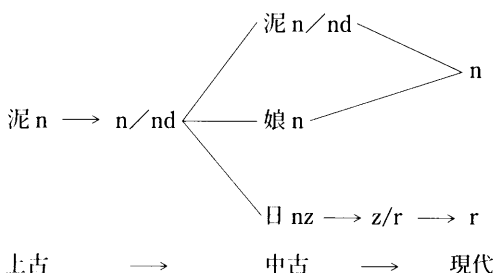
匣 喻 影——亦是喉中音濁。

n → nz の変化は即ち擦音化であった。摩擦音要素の介入によって、舌頭鼻音は舌面鼻音となり、n → nj → nz, そして現代標準語の r に至った。現代の r は鼻音舌面の要素がともに無くなり、有声の摩擦音だけとなった。そのいきさつは、つまり n → nj → nz → z/r → r であった。

しかし、閩南日母の l/d は「上古音的殘餘」とすると、上古時代の n からどのように変化したのであろうか？ 考えられるのは n から nz 変化する間、もう一つ別の音素の存在があり、それがすなわち nd であった。nd → d, 鼻音の消失しによって、l に近い d が残った。

資料によれば、鼻音声母の非鼻音化は普通中古時代において起こった音声の変化と見られる<sup>(7)</sup>。ところが、もしも六朝以前 nd 既に存在するとすれば、つまり、上古時代において、鼻音声母の非鼻音化現象は既に起こったことも考えられる（金，94）。

上古時代、もともと n である泥母の一部は非鼻音韻母の前では nd となった可能性があり得る。推測してみれば、以下のとおりであろう。



nd → nz の可能性について、『韻鏡』（南宋張麟之の序文，1161年と1203年，唐代韻図，一卷，著者不詳）などは日母を正齒音の3等には配置されているところを見ると，i, u 介音の多いことに違いない。nd+i, 狭母音 i の介入によって，舌頭鼻音破擦音の nd が舌面摩擦音の nz に変化するのもあり得ることで，不自然ではない。よって，漳州音の dz は nz から鼻音が消失して，完全擦音化へと変化したのが不可能ではないとも言える

だろう。

## 4.2 閩南日母

日母は閩地方においては幾つかの層があると考えられる。最も古いのは閩東、閩北地方の n 層で、n は呉音のように、六朝以前の言語層と見られる。その他にも d/l と dz 二つの層があり、l は dz より古いとの考えである。

d/l 層——n → nd → d/l, d/l は鼻音を失った舌頭音である。閩南泉州地方の周辺で、非鼻音化した上古音の nd の残りであり、中古音の nz になる前に中原地方から離れて閩地に入った。後に鼻音が消失して、d/l が残ったが、鼻化音韻母と組合せると [n] に戻りやすくなる。

dz 層——n/nd → nz → dz, dz は鼻音を失い、舌面、有聲、摩擦音である。閩南漳州地方で、中古日母 nz から変化してきたと考えられる。

有坂秀世「漢字の朝鮮音について」の中で、10世紀頃の開封方言の日母についての考察によれば、当時の日母は弛い口蓋的な [z] で、鼻音要素はどちらかといえば、消失していた可能性が強いとのことである。

漳州の dz は z とも書く。その dz/z は鼻音化韻母に影響されない (3.3. 及び [注7] 参照)。

現在の漳州地方では「老派」「新派」の区別が有り、老派の日母 [dz], 新派は [l] (泉、厦音との区別が無い)、羅常培氏1930年調査する当時、そのような変かは既に起こっていたと見られる。しかし、たとえそうだったとしても、[dz] > [l] に説明し難いであろう。

## 5 終わりに

日本漢字音との対照によれば、漳州音 dz の時代は比較的明らかである。それに厦門の l は dz より変化したのではなく、dz と l はもともと別系統の音素で、同じ語音の層ではないとも言える。

泉州厦門の d/l は漳州の z より早い、上古音の残りとする、n にたどるにほかはない。もしも n → nz の間 nd が存在するとすれば、d/l へ

の変化にも説明ができる。泉州廈門の他にも「日」母はlとする方言が幾つかある。たとえば濟南（山東）、揚州（江蘇）、南昌（江西）など。故に、閩南日母のlは孤立しものではなく、あるグループ的变化と考えられる。

### 参考資料

1. 羅常培1930『廈門音係』。台湾 古亭書屋
2. 羅常培1930『唐五代西北方音』。中國 上海
3. 王育徳1969『台湾語音の歴史的研究』。東京 第一書房, 1987。
4. 洪惟仁1993『閩南經典辭書彙編』。台湾 武陵書局
5. 藤堂明保1984『新訂中國語概論』。東京 大修館
9. 藤堂明保1980『中国音韻論』東京 光生館
7. 藤堂明保『漢和大辞典』。学研, 1995.4.
8. 周長楫1991『閩南話與普通話』。北京 語文出版社
9. 周長楫編纂『廈門方言辭典』。中國江蘇教育出版社, 1993。
10. 章太炎1919『國故論衡』。中國 浙江
11. 黃典誠1985.6.『彙音與南曲』。中國南音學會學術討論會85.6, 泉州。
12. 黃典誠1982「閩南方音中的上古音殘餘」。『語言研究』3, p172-187
13. 『漢字方音字彙』第二版, 1985。中國文字改革出版社
14. 有坂秀世「漢字の朝鮮音について」, 「隋代の支那方言」。『国語音韻史の研究』1957, 東京 三省堂。
15. 金徳平1994.4. 「從日語漢音試論唐長安話明母音值」。『音韻學 研究』第三輯, p178-182。
16. 『日本語教育辞典』日本語教育学会編。大修館書店, 1982。

### 注

- (1) 14と17の区別は b (m), l (n), g (ŋ) にある。それは同一音素の条件付きバリエーションで、非鼻音化母音の前では b, l, g, 鼻音化母音の前では m, n, となる。  
例えば年 [lian] [nī], 命 [biŋ] [mīā], 誤 [gɔ] [ŋɔ] 等は、文語音と白話音の違いで、意味上の区別がない、普通は b, l, g にまとめてみる (14)。しかし、実際に m, n, ŋ のような音素が存在しているので、区別するために分けてみる見方もある (17)。
- (2) 漳州の声母は泉州より一つ多いので、15 (18) 声母となる。
- (3) 漳州十五音の後、汕頭『潮聲十五音』, 福州『正音通俗表』, 建甌『建



州八音』等が編纂された。

- (4) 『八音字義便覽』は閩音係韻書の嚆矢と言われている。明代(16世紀)の戚繼光が福州方言のために編纂した(一説、幕僚である音韻学者の陳第編纂)。『珠玉同聲』(17世紀)は清の林碧山『八音字義便覽』に基づいて改定した本である。「戚」と「林」は二人の姓を取ったもので、「八音」とは八声調の意味である。

- (5) 福州音「日」母字(文:白)

入 ih : nih          若 yoh : nuoh

仁 in : nin          忍 yn : nun

吳方言「日」母字(文:白)

人 zən : nin          認 zən : nin

染 zø : nii          讓 zaŋ : niaŋ

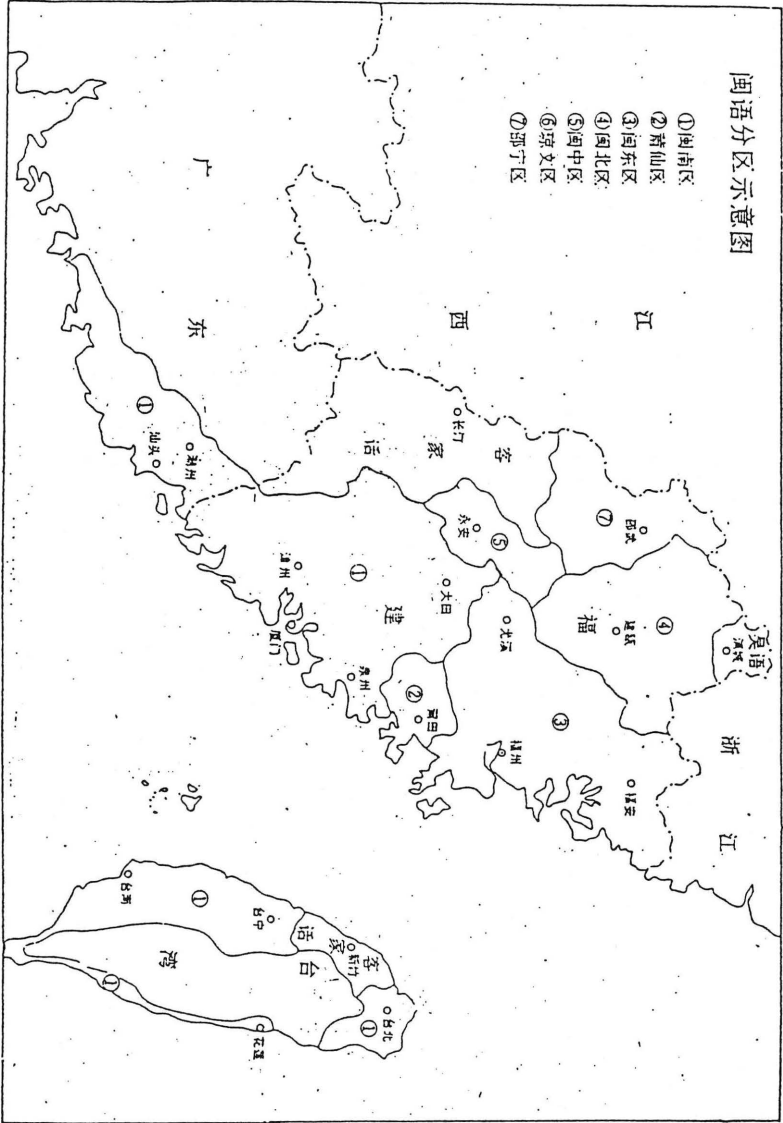
- (6) 漳州音の日母字には僅かな鼻音化韻母が残っているが、声母への影響は殆どない。例えば 爾 zī, 乳 zī。

- (7) 敦煌から発見された『千字文』『大乘中宗見解』『阿彌陀經』『金剛經』などには、チベット文字による音注のついた漢字が1152字もあります。羅常培唐五代西北方音によると、「漢音の明母(m)一般に'bと記され、泥母(n)の字は'dと記される。ただし鼻音韻尾をもつ字の声母はmやnのままである。'b, 'dはそれぞれmb, ndの音を表わすのであろう」,「日母の字(六朝時代はni, 唐代はri)は、兒zi, 人zin, 然zenのようにz(じつはrをあらわす)で記される。また、漢語の娘母(n)の字は、尼diまたは女nzoのように記される」,それらはすなわち「唐代長安語の特色」である(藤堂, 89, p223)。有坂氏「漢字の朝鮮音について」には、「唐中葉以降の西北支那方音では、明泥娘疑母の頭音は、特殊の条件の下にいる場合を除けば、全てmb nd nd nggの如き形になっている。……即ち、これらの頭音は、常に外国語の有声破裂音と同一視される」と指摘した。

附:一. 閩語方言図(『方言』85. 3. p. 172に拠る)

二. 中古36字母・音價推定表

三. 閩南声調表



附 二.

隋唐漢語の声母表(宋代の韻図にのっているもの)

36 字母 全表	清濁区分 発音部位	全 清	次 清	全 濁	次 濁	清	濁
		1. 唇 音	{ 重唇音 輕唇音 幫 非 p f	滂 敷 p' f'	並 奉 b v	明 微 m w	
2. 牙 音		見 k	溪 k'	群 g	疑 ɣ		
3. 喉 音		影 ·	曉 h	匣 ɦ	喻 y		
4. 舌 音	{ 舌頭音 舌上音 端 知 t ʈ	透 徹 t' ʈ'	定 澄 d d'	泥 米 娘 n l n			
5. 齒 音	{ 齒頭音 正齒音 精 照 ts tʃ	清 穿 ts' tʃ'	從 神 dz dʒ	日 r	心 審 s ʃ	邪 禪 z ʒ	

附 三.

閩南声調表

調 類 地区・調値 例 字	平		上		去		入	
	陰平	陽平	陰上	陽上	陽去	陰去	陰入	陽入
	東	同	董	動	洞	棟	督	獨
泉	33	24	544	22	去声 31 4		23	
厦	44	24	上 53	陽去 22		21	32	4
漳	44	13	上 53	陽去 22		21	32	12